

差別とは、部落出身であることを明かせないこと

③

マイノリティに対するアイデンティティの侵害のなかで生きること

竹本昇（設置理念に則ったピースおおさかを取り戻す会 共同代表）

良心に問いかけられたこと……

◆指紋押捺拒否運動

私は、かつて伊賀市に勤務した地方公務員でした。私が市役所在職中の1985年に、外国人登録法による指紋押捺強制に対する押捺拒否運動が全国的に展開されました。

現在、この「指紋採取」は、根強い反対の結果、廃止されていますが、当時はまだ強制的に行われており、伊賀市においても指紋押捺を拒否する在日朝鮮人がいました。

このとき、私は初めて、在日朝鮮人の存在を本当の意味で知ることになりました。もちろん、それまでも朝鮮人が日本に住んでいることを聞いていましたが、その認識は、自分の生活とは直接関係なく、「自分は差別も抑圧もしていないんだ」と傲慢に思い込んでいました。

私は、在日朝鮮人が、なぜ日本で生活しているのかということを学校教育でも社会教育

でも教えられず、学ぶ機会もありませんでした。朝鮮に対する日本の植民地支配についての知識は全くありませんでした。ですから、当時の外国人登録における指紋押捺については、「印鑑の代わりに指紋を押した」ということと同じ程度の理解でしかありませんでした。

しかし、自分の職場を通して、指紋押捺に拒否する在日朝鮮人の存在を知ったときから、自分と在日朝鮮人との存在の関係を捉えなおさなければならないと思うようになりました。といいますのは、公務員として、民主主義、自由・平等を遵守して、業務に当たっていかねばならないと自負していた私にとって、この指紋採取とは、在日朝鮮人に対する差別、人権抑圧行為を強要する業務であることを知ったからです。

◆ある在日朝鮮人との出会い

私は、知人から誘われて別の要件で、伊賀伊役所で指紋押捺拒否をしている女性の自宅

に招かれることになりました。今思うと恥ずかしいことですが、このときの私は、内心では、公務員である自分が、指紋押捺拒否をしている人と接することは、自分が抑圧する側の日本社会から異端者扱いされることの不安と保身が頭をよぎってマズイと思いました。今では、この肌感覚で在日朝鮮人を拒否することが差別と考えていますが、当時の私は、そんな感性のレベルまで沁みついた差別意識を抱きながら、在日朝鮮人の女性宅と訪れることになりました。この人との出会いが、今日の私を形づくることになりました。この在日朝鮮人から、直接、言葉で言われたのではないのですが、「自分は在日朝鮮人と対面して、どう生きるのが」と問われたのです。「朝鮮人を犠牲にして生活を成り立たせていることは、人間として恥ずかしくないのか、人としてこれが正しい生き方なのか」と鋭く強く良心に問いかけられたのです。

植民地支配の加害者としての「日本人問題」

◆歴史を知ることの大切さ

この在日朝鮮人の問いを受けたときから、私は、日本と朝鮮との関係の歴史、日本の植民地支配の実相を学ぶことに努めました。この在日朝鮮人女性から『閔姫暗殺』や指紋押捺拒否の闘いを記した『ひとさし指の自由』などの書籍を借りて学習しました。この本は今も借りっぱなしです。1970年の日立就職差別事件を契機に、民族差別と闘う連絡協議会（民闘連）が組織されました。その民闘連主催の1979年に川崎市で開催された集会に参加したりしました。

その結果、日本政府は、植民地支配の歴史的事実を明らかにすることなく、反省することも謝罪することも賠償することもなく、依然として在日朝鮮人を治安管理的対象とみなし、その治安管理的の手段として外国人登録指紋押捺を強要してきたことを知りました。そして、在日朝鮮人に対する日本人の無知・無関心というのは、こうした日本の過去の植民地支配を容認することである、と知りました。

また、朝鮮植民地支配の実相を知る中で、日本人としての責任、それはまず知ること、

そして、このような歴史を負う人間としては、被害者たる在日朝鮮人に対して、加害者たる日本人である自分はどう生きるべきかを問わなければならない問題だということを知りました。

歴史的加害行為に対する反省を抜きにしては、自分自身の人間としての尊厳が持てないということも知りました。そして植民地支配の犠牲者としての「朝鮮人問題」とは、植民地支配の加害者としての「日本人問題」として捉えなければならないという理解に至りました。そして何より、自分が職業とする公務員とは、植民地支配を反省することなく、朝鮮人から指紋を採取することによって生活を成り立たせている存在ではないかとも思いました。

朝鮮人に対する植民地支配の歴史的加害、朝鮮の資源・朝鮮人の労働力・生命を奪って日本という国を成り立たせてきた歴史的事実、私はその加害の歴史の恩恵に浴して生を営む存在であるのに、そのことの自覚も反省もできない人間でいいのかという問いかけが、抽象的な問題ではなく、自分の職場で、目の前にある現実の問題として差し出されたのです。

◆あるべき生き方と、生活維持の狭間から

「指紋押捺は非人道的だけど、これも制

度だから仕方がない」と思って容認することは、かつての植民地支配についても「日本国家の政策だから仕方がない」として植民地支配の加害行為を肯定することと同じになります。また、「生活の維持のため仕方がないのだ」と思って容認することは、「朝鮮人の生活を犠牲にした上で、自分の生活の安住を貪ってきた日本人であることを継続していくことである」ということになります。これでは、人間としての誇りを捨てることになります。

しかしその一方で、「公務員は法を遵守し

川と河岸の間の河川敷が元の地区があった場所です。元の場所にも堤防はありました。現在は、河川改修事業により、元の堤防は除去され川幅が広められて、地区住民は移転して写真奥の場所に移転しました。



て法を執行する存在なのだから、それができないのなら市役所を辞めるのが筋だ」という思いと、自分と家族の生活維持のために市役所を辞められないという狭間の中で悶々とする日々を送っていました。

自分一人では何もできないと思い、当時、私が所属していた労働組合である自治労三重県本部の事務所を訪ね、指紋押捺制度反対の運動を起こせないものか相談に行きましたが、地方公務員法の「信用失墜行為の禁止」の違反になるという意見であり、この願いは実現しませんでした。

それ以後、市役所を辞めるわけにはいかなかった私は、「差別をなくすことについては、自分のできるところで、自分のやれることをやればいい。現実の生活の中で差別制度に抗しきれないからといって、自分の内面の世界まで差別を容認するような生き方は辞めよう」と自分に言い聞かせて今日まできました。そうであるから、取り組めるのに取り組まないこと、これこそが罪だと思っています。

◆ささやかながら、取り組んできたことについて

○民族差別による離婚裁判○

川崎市で開催された民間連主催の集會に参加したとき、交流会で、在日朝鮮人の青

年と一緒に日本酒の冷酒を飲むことになりました。この青年とは、一昨年、61歳でなくなった私の親友のことです。

彼は、このとき恋愛して結婚した日本人女性から離婚の裁判を訴えられていました。彼女は、自分から彼の家に押しかけてきて結婚はしたものの、妻の両親からの執拗な民族差別意識の注入によって、彼女自身も民族差別者に変身してしまい、裁判で離婚を訴えるという差別事件でした。この裁判は、悪質な民族差別だということを誰も理解する日本人はいなかったそうです。そこで。彼は、100人の日本人にこの裁判の真相を訴えて、それでも理解されないのなら、もう自分は刑務所に入ってもいいという覚悟で、この理不尽さを訴えようと思っていたときに、86人目に、私と出会うことになったと言っていました。

相手方の訴状には、夫である彼は酒飲みで粗暴で結婚生活を維持できないと訴えられており、その証拠として、彼の暴力によって被害を受けたという医師の診断書と荒れた現場写真が裁判所に出されていました。この暴力事件というのは、相手の家族から暴力を受けて、彼が応戦したことが真相でしたが、そんな彼の証言を裏付けるものはありませんでした。私は、この訴状を見せられたとき、朝鮮人差別が当然のような日



19歳で亡くなった息子と。

本社会では、裁判に勝つことはとてもできないと思いました。しかし、彼がウソを言っていないことが解り、民族差別は許せないという支援者に恵まれて裁判は勝利しました。裁判を起こした妻側の民族差別が認められ、「民族差別を謝罪する」ことを文書化して500万円の慰謝料を支払われることになりました。真実が勝ち、当たり前のことではありますが裁判官の良心を信じさせられる裁判でした。

(参考ホームページ「李在一裁判を支援する会」<http://www.han.org/a/identity/>)

○朝鮮の乳幼児への粉ミルク支援○

1998年8月31日、朝鮮が「テポドン」を打ち上げたとき、「朝鮮が日本にミサイルを撃ってきた」というデマ宣伝がマスコ

ミを通して大々的に報道されました。当時、朝鮮は、洪水と干ばつで、飢饉にみまわれ、食料難で多くの人々が栄養不良や病気で亡くなっており、国際社会では人道支援活動として食糧や医療の支援が行われていました。

しかし、このテポドン一発で、日本政府と、一部の市民運動団体を除いた日本の市民運動団体は、人道支援を中止してしまいました



ハンクネットの人道支援活動で、朝鮮の子どもたちに粉ミルク支援のため、朝鮮赤十字社のトラックに粉ミルクを搬入する
(2016年11月23日に訪朝)

た。私は、結婚における民族差別裁判が一段落した彼と、この裁判を支援していた在日朝鮮の知人の2人から、人道支援を打ち切る日本社会の民族排外は間違っているとして、朝鮮への人道支援活動を行う会を立ち上げようとの声をかけられました。

私は、この年の9月7日、19歳の息子を亡くしました。その喪失感で、毎日毎日、深酒を飲んで過ごしていましたので、とても人道支援活動に参加できる気力はありませんでした。しかし、何日か経ったある日、私の脳裏に、「関東大震災のときに朝鮮人が井戸に毒を入れた」といつて何千人もの朝鮮人を虐殺した日本民衆の民族差別意識と、今回のように朝鮮がミサイルを撃ってきたというデマ宣伝で朝鮮の子どもたちが亡くなったのもいいとして人道支援を打ち切る日本民衆の民族差別意識は同じだ、という想いが湧いてきました。それ以後、私は、この朝鮮人道支援ネットワーク・ジャパン（ハンクネット）の活動に参加することになりました。

◆信頼を得られる運動が大事

私は、「拉致事件」の報道や「北朝鮮」バッシング報道に心が痛みます。それは日本の植民地支配という加害の事実を欠落させて、朝鮮を最大の形容詞を使い、悪い国で

あると宣伝するからです。

もちろん「拉致事件」は、きちっと解決されなければなりません。日本が朝鮮人を強制連行し死に至らしめた加害の事実も解決されなければなりません。「日本人の命は大切だが、朝鮮人の命は無視してもいい」という民族差別的な観点から、「日本人の命も、朝鮮人の命ともに大切」という観点に変えることがこの問題の解決であると思います。

そのためには、植民地支配の歴史の事実を知る必要があります。しかし、歴史の事実を知らないことから、「拉致事件」以後、「北朝鮮」は悪の巣窟の象徴であるかのような言説がマスメディアを通して流され、それがそのまま日本人間の日常会話でなされています。日本の植民地支配の加害事実を知らないまま、そうした発言が繰り返されています。それを聞く度に私の心はたいへん痛みます。

また、私には大切な在日朝鮮人の友人が多くおります。この友人たちは、日本の植民地支配について、本当に真つ当な人間としての生き方について、その歴史の事実を知り謙虚に反省できる人間となるよう私に導きを与えてくれた存在でもあります。この人たちに信頼される人間になりたいと強く思っています。(つづく) (たけもと のぼる)